

安部公房全作品

11

安部公房全作品 111

定価 700円

印刷 昭和48年2月15日

発行 昭和48年2月20日

著者 安部公房 (あべこうぼう)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京808 電話(03)260-1111

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 大口製本

© 1973. Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

安部公房全作品 **11** 目次

おまえにも罪がある 5

友達 69

榎本武揚 133

棒になった男 191

未必の故意 235

安部公房全作品

11

おまえにも罪がある

九景

〔登場人物〕

隣人男

隣人女

男

死体

女

新聞配達

買物の女

警官A

B

C

私服D

隣人男

あんのじよう、返答はない。

（正面にドア一つ。怪しい隣人男、下手より登場。左右に気をくばりながら、表面は何くわぬ気に、ドアの前まで来て、軽くノックしてみる）

1

隣人男

落着け、落着け。何事も、何事もなげにふるまえ

（ポケットから、先のまがった針金を取り出し、その先をペロリと舐めたとたんに、上手から下駄の音。銭湯に行つたついでに、夕食の買物をして来ようといういでたちの女である。隣人男、あわててドアから離れ、体操の真似事を始める。すれちがう女に、親しげな会釈。薄気味悪そうに立ち去った女を見送り）

隣人男

ニアオー。（と、猫の鳴きまね）

（あらためて、針金の先を舐め、ドアにすりより、左右を一瞥すると、素早くその針金を鍵穴に差し込む。あいている方の手で、耳をつまみ、精神の統一をはかる。鍵がはずれる音。飛び退いて、左右をうかがい）

ば、何事もなく見えるものさ。そうだと、たとえば、電気ガスの集金人、郵便配達、保険の外交員、化粧品セールスマン、そう言った連中が、あらぬ嫌疑もかけられずに、町から町へ、戸口から戸口へと、自由自在に歩きまわっている事実を考えてみるがいい。要するに世間というやつは、他人に対する信頼から成り立っているものなんだな。他人から信じてもらおうと思えば、まずこちらから、他人を信用してかかることだ……（声をつくつて）あの男の行動に、何か不審な点が見えなかったかですって？ とんでもない、そんな素振りには、毛ほども見えませんでしたよ……

（同時に下手から、死体をのせた乳母車を押して隣人女が走りこんでくる。隣人男が、待っていましたとばかりに、ドアを開ける。隣人女、乳母車を押してドアの中に駆け込みながら）

隣人女 靴を忘れちゃったわ、急いでとって来て！

（隣人男、うなずき、後ろからドアを閉め、下手に急ぎ足。ドアの向うで死体が床に落ちたらしい物音。隣人男、ぎくりと立ちすくむが）

隣人男 なあに、世間を信じていさえすりゃ、恐いものなしさ。（下手に退場）

（上手から、新聞配達が登場。夕刊を一部、ドアの下にすべり込ませて下手へ。）

入れちがいに、靴を一足さげて隣人男が戻ってくる。左右をうかがいながら、ドアを開け）

隣人男 急げ！

（中から隣人女が、空の乳母車を押して飛び出して来る）

隣人女 なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……

（そのまま下手に駆け去る。隣人男、靴をそろえてドアの向うへ押しやり、一度中をのぞいてから、ドアを閉める。上衣の袖で、くるりと把手の指紋をぬぐうと、何くわぬげに、悠然とした足どりで下手に退場）

—— 暗転 ——

（アパートの一室。下手にドアと、一段低いたたき。正面に、カーテンで仕切られたベッド。上手に、仕事机と椅子一つ。高めの窓。その奥に流しと洗面所があるらしい。出来れば部屋の壁はないほうがよい。）

スポットで部屋の中央に倒れている死体。

スポットが消えるにつれて、部屋全体がぼんやり明るくなる。窓に夕空。街の騒音。部屋の外を迫る靴音。短い犬の声。

口笛といっしょに足音が近づく。停って、ドアが開く。男登場。左手に靴、右腕に買物の紙袋を持っている）

男

妙だな、鍵が外れているぞ……（首をかしげるが、すぐまた鼻歌になり、靴を右手に持ちかえ、ドアを閉め、電気のスイッチをひねりながら、手をつかわずに靴を脱ぐ。ふとたき、の死体の靴を認め、鼻歌がやむ。振り向いて、死体を発見する）誰だろう？……（眉をひそめて、死体に近づく）酔っぱらいが、部屋を間違えたのかな？ もしもしも……もしもし……（舌打ち）弱っちゃうなア……（荷物を机に置き、死体の肩に手をかけ、顔をのぞき込もうとして、はじめて死体で

あることに気付き)……死人だ!……(そろそろと後ずさり、玄關のたきまで行つたが)……いや、待てよ……まさか、顔見知りの仲だとは思われないが、警察にとどける前に、一応たしかめておいた方がよさそうだ……(こわごわ引き返し、死体のそばに腹這いになって、その顔をのぞき込み)……見たことがないこんな顔、たしかに見おぼえがない……おや、血じゃないか! (はね起きて) 殺人らしいぞこいつは!……とんでもないことになった! (こめかみの辺を両手でおさえ、不安そうにあたりを見まわす)……えらいものに、かかわり合いになつてしまつたな……しかし、絶対に赤の他人だ……どうころんでも、おれに疑いがかかる氣づかいはない……そうだとも、あるもんか……(ドアの方に行きかけて) しかし、それにしても、迷惑な話だなあ……(時計に目をやり) あと三十分で、彼女がやつて来るつていうのに……むろん、おれに疑いがかかったりする氣づかいはないにしても、ぶちこわしたよ、刑事やなんか、どこぞか乗り込んでくるわけだろ……いくら弁解したつて、いづれ部屋の中をかきまわされたり、尋問されたりで……(間)……ふん、家宅搜索か……(見まわす)……こいつはちよつと、まずいんじゃないかな。彼女の見ている前で、あらいざらい、店をひろげさせら

れるつてのは……まずいよ、絶対にまずい……せめて、あれとあれだけでも警察にとどける前に、始末しておかなけりや……(あわてて机の方へ行きかけるが、ふと死体のそばで足をとめ) しかし、分らんなあ、なんだつてまた、選りに選つて……(ぎくりと振り向き、おそるおそる、下手の「流し場」の方をのぞき込む。誰も居ないようなので、ほつとす)……おれの部屋で、人殺しなんかを、しでかしやがつたんだらう? 偶然かな、それとも……(考えこみ) まつたく、理解に苦しむよ……そう、多分、警察だつて理解に苦しむんじゃないかな……いったい、何ういうわけで……(間)……いや、いかん! 警察が理解に苦しむというのは、あまりかんばしいことじゃないぞ……とりもなおさず、それだけ、おれの方に疑いがかかつてくるわけだから……なるほど、おれの犯行だという証拠は上らないかも知れない。しかし、おれの犯行でないという証拠も、同じくらい上らないわけだから……まずい、まずい、ぜんぜんまずい……どうやら、想像以上の、面倒にまき込まれたらしいぞ……(間) そうだ、アリバイがあればいいわけだ!……(考えて) アリバイ……だが、アリバイを証明するためには、こいつの死亡時刻が分らなきや駄目だな……(死体に近づき、眺めまわす。それから、

こわごわ、死体の上衣の袖をつまんで、腕を持ち上げてみる。

腕は、ぐにやりと持ち上る。ぞっとして、とり落す……ふん、

死後硬直は起きていないらしい……ええと、死後硬直が起きるのは、死んでから何時間めくらいだったわけ？

……まあ、いずれにしても、まだ死にたてに近いつてことだろうな……畜生、ますます具合が悪いじゃないか！

……仮に、死んでから一時間以内だとすると……（以下、刑事とのやりとりのつもりで）「あんた、その部屋に戻るまでの、一時間ばかりのあいだだねえ、いったい、何処で、

何をしておったのかねえ？」「はい、大体のところ、まあ町をぶらぶらしていたように思います」「ぶらぶら？

その、ぶらぶらの目的は？」「ただの、ぶらぶらで、べつに目的はありませんでした」「おかしいねえ、あんた

は今日、彼女を部屋に呼んでおったんだろ？ そんな楽しみがあつちゅうのに、なんでぶらぶらなんかしてお

ったのかね？一刻も早く部屋に戻つて、彼女を迎える仕度でもするのが、当然の心理ちゅうものではないかね

え」「そうかもしれせん。でも僕は、彼女が来る約束の時間ぎりぎりまで、部屋に戻りたくなかつたのです」

「なるほど、なるほど……つまり、あわよくば、自分より先に、彼女に死体の発見者になつてもらおうと……」

「とんでもない！ 分らないのかなあ……恋愛をしている独身男にとつて、一人っきりの部屋が、どんなに空虚で味気ないものか……」「いやに、こらえ性がないんだねえ。たつた一時間のしんぼうじゃないか」「ええ、第三者の眼から見れば、そうでしょう。いくらからかわれても、仕方がないと思いますが……」「と、言うところ、つまり、腑に落ちん行動だったちゅうことを、あんた自身でも、認めるちゅうことだね？」「誰もそんなことは言つていません！ それじゃ、うかがいますが、仮にぼくが黒だとした場合、その動機はいつたい何なんです？」

「そりゃ、あんた自身のほうで、よくご存知だろうさ。こちらとしちゃ、白という証拠がないかぎり、黒と判断するしかないんでねえ……」

（足音が近づいてくる。男、ぎくりと息を飲む。飛んで行って、ドアの錠をかける。足音、通りすぎる）

……冗談じゃない、そんな馬鹿な話があつてたまるものか！……白は白さ……とにかく、死体をこのままにしておくわけにはいかないんだ……ええと……何をしかけていたんだっけ？……むろん、警察には行く……そいつは、まぬがれないことだが……そうそう、せめてその前に、

身のまわりの整理をしておくんだったな……（机に駆けより、引出しの中をかきまわす）……日記帳と、写真帳……これこれ（ドアの方に引き返しながら）こういう、誤解の種になるようなものは……（ふと足をとめ）いや、待てよ……外のごみ箱だって、安全とは言いかねるぞ……なにしろ、殺人事件だから……兇器を始末したかもしれないような場所は、徹底的に調べられるはずだ……よし、火鉢の中で、燃してしまおう……

（火鉢を引きずってくる。日記帳の数ページをむしって、中に入れ、マッチをすって火をつける。とつぜん、ぎくりと立ち上る）

待てよ、それとも、あり得ないことじゃない……他人の部屋で、殺人をやったのけるくらいの犯人なんだからな、おれに罪をなすりつけるために、それくらいの工作は……そうさ、鍵だって、合鍵を使って開けてしまったくらしいの奴なんだ……ほかのことだって、抜け目なくやっているに違いないのさ……畜生め！……うかうかしていと、とんだ目に会わされてしまうところだったぞ！

（死体に近づき、仰向けにさせようと、手をのばしかけて、

ためらう。死体のわきに膝をつき、やはり触れかねて、また立ち上ってしまう）

……どうも、あまり気持のいいものじゃないな……畜生、おれは、おやじが死んだときだって、葬儀屋にまかせつきりで、指一本触れずにすませたのにな……

（見まわし、椅子を持って来て、それを梃てこに、死体を仰向けにころがす。後ずさり、それから恐おそごわのぞきこむ）

……人間も、こうなっちゃ、おしまいだなあ……どんなうらみを買うような真似をしたのかは、知らないが……（額のあたりを、すかして見て）兇器は、刃物じゃない。金槌か、こん棒か、なにかそんなものだな……（上衣の裏をめくって見て）ネームは、はぎ取ってある……たしかに、玄人の手口だよ……

（死体のまわりを、まわりながら、次々ポケットの中をしらべていく）

万が一、こいつのポケットに、おれの名刺だとか、何かそんな、おれに関係のあるものでも入っているものなら、いくら赤の他人だと言い張ってみても、もう言い逃

れは出来ないわけだからな。

空っぽだ……どれも、これも、完全に空っぽだ……身元を証明するものは、何もない……やれやれ（ほっとしたように、立ち上り、ふと）待てよ！（火鉢の方を振り返り）まづかつたかな、警官は、あの燃えかすを見て、なんと思うだろう？……下手な小細工のおかげで、かえって毘に……

（とつぜんドアに、軽いノックの音。

男、ぎくりと立ちすくむ。再び、ノックの音。男、やおら死体をベッドの下にこがしこむ。三度目のノック。日記と写真帳の隠し場所を求めて、うろたえる。火鉢を掘って、中に埋めこむ。髪をなでつけ、深呼吸をし、つくり笑いを浮べてドアに向う）

男 はい、只今……

（ドアを開けると同時に、つつと入り込んで来たのは、隣人女である）

隣人女（笑いをたたえ）今日はまた、ずいぶんとお帰りがお早いですねえ……

男 ああ、奥さんですか……

隣人女 あのうち……（部屋をのぞき込もうとする）

男 なんてしよう？

隣人女 いえ、なんでもなけりや、よろしいんですのよ……そりやもう、本当に、よろしいんですけどね……（男の表情をうかがいながら、笑いがこぼれて行く）

男 ……………

隣人女 ただ、ほら、お宅はいつも、月水金には、たいていお帰りが十時過ぎでしよう？

男 ああ、なるほど……今日はちよつと、特別な用があったものですから。

隣人女 それなら、まあ、ご本人がお帰りなんだから、変な音くらいしたって、なんですわねえ……べつに、騒ぎ立てなくても、なんですわねえ……

男 何か、変な音がしたんですか？

隣人女 いえ、あなたが、しないとおっしゃるのなら……（ふと、たたきの死体の靴を注目しながら）でも、近頃は、なにかと物騒な話も耳にしますでしょう？

男（隣人女の視線に気づき、狼狽気味に）いえ、それほどでもないと思いますが……

隣人女 そうかしら……じゃあ、お帰りになったのは、何時頃でした？

男 (思わず、時計を見かけたが、すぐに氣をとりなおし) ぞ心配なく。ね、このとおり、本人は無事なんですから。

隣人女 でも、はつきり、おたしかめになったんですの？

男 何を？

隣人女 何って……その……まあ、ご無事で何よりでしたわねえ……

男 一体、何を疑っていらっしゃるんです？

隣人女 疑うですって？ まあ、人聞きのわるい……

男 じゃあ、そんなに、じろじろのぞき込むことはないでしょう！

隣人女 のぞき込んでなんか、いませんわ。私、においを嗅いでいるのよ。

男 におい……？

隣人女 何かしらん、このにおい……

男 何も、におってなんかいませんよ！

隣人女 なんだか、いぶっているみたいな……まさか、漏電じゃないでしょうねえ。

男 ああ、これか……これはね、ちよつと、火鉢の中で、紙を焼いたんですよ。ほら、部屋の空気がじめじめしているでしょう？

隣人女 へえ、空気がねえ……

男 そう、ちよつと、紙を二、三枚ね……

隣人女 へえ、二、三枚ねえ……では、どうも、お邪魔いたしました……

(隣人女、急に退場する。男、ドアをおさえて、重い溜息。鍵をかけ、たたきから死体の靴をとり上げて)

男 やれやれ、燈台もと暗しとはよく言つたもんだ……あぶなく、こいつの始末を忘れてしまふところだったぞ…… (靴の隠し場を求めて、部屋の中を見まわす)

(と、同時に、ベッドの上に灯が入り、紗幕をとおして、坐り込んでいる死体が見える)

死体 君、君、ぼくの靴を、どうするつもりなんだ！

男 (ぎくりと) 誰だ？

死体 僕だよ……君に今、ベッドの下におし込まれた、死体さ。

男 (ほっとして) なんだ、生きていたんですか？

死体 生きてなんかいるもんか。

男 すると、幽霊……？

死体 まあ、そんなものかな…… (と、ベッドの中から這い出してくる)

男 (後ずさりながら) いいですよ、わざわざ出て来なくて。

男 何か、誤解しているんじゃないですか？ 僕は、あなたがそんな目に会ったことについて、ぜんぜん関係なんか無いんですからね。

死体 無責任なことを言っちゃいけないよ。

男 なにが無責任なものか。いいですか。あなたは勝手に僕の部屋で死んでいた。僕とあなたは、完全に赤の他人なんだ。迷惑しているのは、こっちの方ですよ！

死体 答えになっていないねえ。

男 ……………

死体 僕が聞いているのは、その靴のことなんだが……

男 靴？

死体 君は、僕の靴を、どこか目につきにくい所に、おし込もうとしているんだろ？

男 (靴を見て) そう……そうかもしれないですね……

死体 もし君が犯人でないのなら、なぜそうまでして、事件の現場に変更を加える必要があるのかな？

男 (まごつき) それは、つまり……もう問もなく、ここに

客が訪ねて来ることになっているものですから……

死体 それじゃ、よけいに、さっさと警察にとどけてしまつたらどうなの？ そんなおかしな小細工をしたりする

暇があるのなら……

男 むろん、とどけます。とどけますとも。たのまれたつて、死体と同居生活なんて、まっぴらだからね。ただ、その前に……

死体 その前に？

男 心を静めて、自分がおかれている事態を、とくと検討しておかないとな……下手に巻き添えをくつたりしないように……

死体 それそれ、そう言いながら、君は自分で自分の墓穴を……

男 ちよつと、黙っていて下さい！ ええと、僕はさっき、

何をしかけていたんだっけな？

死体 大事な日記帳と、ヌード写真の始末だろう？

男 分っていますよ、そんなことぐらい！

(男、靴をもとの場所に戻し、火鉢から日記帳と写真帳を掘り出し、灰をはらって、日記帳の残りを千切り、火をつける)

死体 ……(説得するように) あきらめの悪い男だなあ……

自分じゃ、利口に立ちまわっているつもりかもしれないが、けっきょく、自分で自分の首をしめているだけのこ